

マルコによる福音書 6章 1節～13節

2015年11月26日

古本 靖久

1、聖歌 356番 「緑も深き 若葉のさと」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 71 ページ）

4、テキストの位置

前回まで、マルコによる福音書では、「信頼（新共同訳聖書では信仰）」について書かれてきました。

ガリラヤ湖 周辺での宣教 (奇跡)	5:21-24	ヤイロの信頼（前半）
	5:25-34	イエスに寄り頼む女性の信頼
	5:35-43	ヤイロの信頼（後半）
	6:1-6a	ナザレの人々は信頼できない
福音は外の世界へ	6:6b-13	弟子たちの派遣
	6:14-29	洗礼者ヨハネ、殺される

そこでは多くの人が登場し、イエス様の言葉と業を信頼し、イエス様の元に集まって来ました。

しかし今回の箇所では、逆に「イエス様に信頼することのできない人々」の姿を描きます。その人たちは、イエス様の生まれ故郷の人たちでした。なぜそのようなことがおこったのでしょうか。またイエス様は弟子たちを派遣していきます。ここから福音は外の世界へと、広がりを見せていきます。その分岐点が今日の箇所と言えるのです。

5、節ごとに

◆ナザレの人々はイエス様のことが信頼できない

6:1 （そして）イエス（彼）はそこを去って（から出て）故郷にお帰りになったが、（そして彼の）弟子たちも（彼に）従った。

イエス様は「そこから出て」、故郷へと行きます。そこというのはヤイロや出血の止まらない女性などの人とイエス様が出会い、その信頼を認められた場所でした。その場所と、これから行く故郷との対比が見られます。

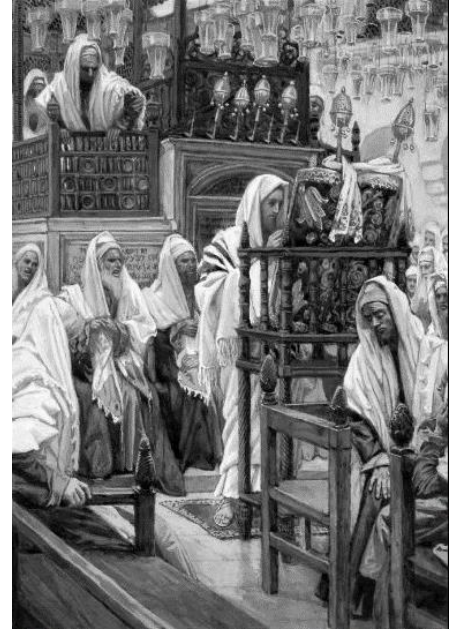
イエス様は福音を携えて、生まれ故郷であるナザレに戻って来たのですが、その福音は果たして届いたのでしょうか。

6:2 (そして) 安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚い(驚嘆し)て言った。「この人は(に)、このようなことを(は)どこから得た(生じた)のだろう(か)。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。

マルコ福音書はイエス様のカファルナウムでの最初の活動(1:21～)として、安息日に会堂で教えたことを書きました。そして今回、故郷ナザレでも同じように、安息日に会堂で教えられたことを書きます。

その後、イエス様はどちらの場所においても、いやしや奇跡によって人々を驚嘆させます。そしてカファルナウムでは、イエス様の元に大勢の群衆が押し寄せてきます。しかしナザレでは、そのような反応は書かれていません。

「これは何なのだ」、「彼は誰なんだ」、これがカファルナウムでの人々の反応でした。しかしここでは、「どこから生じたのか」と人々は疑問に思います。



6:3 この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んで(の所に)いるではないか。」このように、人々はイエス(彼)につまずいた。

彼らはイエス様が誰なのか、知っていたつもりでした。マタイ福音書やマルコ福音書のいくつかの写本では、「この人は」のあとの言葉が「大工」ではなく、「大工の息子」となっています。しかし当時の社会では、大工の息子はよほどのことがない限り、大工です。

そして大工という職業の人は、会堂で話をするような人より、地位も階級も相当に低いものでした。ナザレの村の人々は、そのような自分たちと同じような人物が会堂でみんなの前で話をするのを快く思わなかったのかもしれませんが。

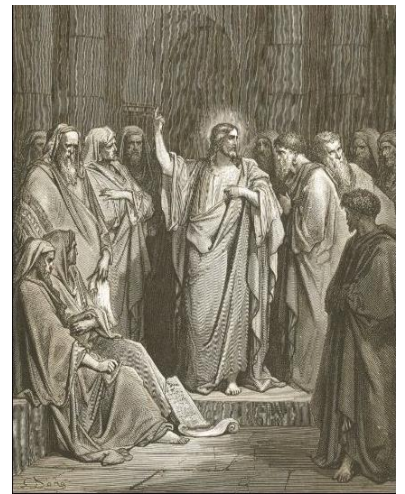
また人々はイエス様を、「マリアの息子」と呼びます。ユダヤの男性は、ヤコブの子ヨセフのように、父の名のあとに続けて言われるのが普通でした。ですから「ヨセフの子イエス」と書かれるはずですが。

ヨセフがすでに亡くなっていたのか、あるいはイエス様の出生に疑問を抱く人々がいて、イエス様は私生児だと暗に非難しているのでしょうか。また、イエス様の父は神さまだということを強調するために、このように書いたと考える人もいます。

6:4 イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、(自分の)親戚や(、自分の)家族の間だけである(以外では、敬われないことはない)」と言われた。

ナザレの人々はイエス様につまずきました。つまずくという言葉はギリシア語で「スカンダリゾー」、英語のスキュンダルの語源です。人口 2000 人にも満たない小さな村においてイエス様がされていることは、人々の常識から逸脱した不祥事だったのです。

そのときにイエス様は、上の言葉を言われます。新共同訳聖書の訳し方だと、故郷では敬われないということに重点が置かれています。しかし原文では、上のような二重否定の文です。つまり、故郷以外ではどこでも敬われるということが強調点なのです。



6:5-6a (そして)そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡(力ある業)を行うことがおできにならなかった。そして、人々の不信仰(頼のため)に驚かれた。

イエス様は故郷で力ある業をほとんどおこなうことが出来ませんでした。この部分ですが、マタイ福音書には「あまり奇跡をなさらなかった」と、イエス様の意志でそうされたように書きます。またルカ福音書では、この場面自体が削除されています。イエス様が無限の力をもっているはずだとする後代の見方に矛盾するから、そう書き換えたのかもしれませんが。

しかしマルコ福音書は、イエス様が力ある業をすることができなかつたと書きます。それは 1 節のときに触れたように、これまでいた場所と故郷との対比を明確にしているからです。これまでいた場所には、イエス様に信頼する人々が登場してきました。そこでイエス様は力ある業をなさったわけです。しかしナザレの人々には、イエス様に対する信頼がなかつた。だからこのような結果になるのです。

<前半の箇所から>

カファルナウムの人たちと、ナザレの人たちの違いは何だったのでしょ。ナザレの人たちは、どうしてイエス様を信頼することができなかつたのでしょうか。彼らはイエス様が何者か、知っていたつもりでした。しかしあまりにも身近にいたために、先入観が邪魔をしてイエス様の教えや業を素直に受け入れることが出来なかつたのではないのでしょうか。

ではわたしたちは、イエス様を本当に知っているのでしょうか。ナザレの人たちのように知ったつもりになってはいないのでしょうか。またわたしたちは、身近な人がイエス様について証しするときに、つまずくことはないのでしょうか。

6:6b-7 それから、イエス（彼）は付近（まわり）の村（々）を巡り歩いてお教えになった。そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能（権威）を授け、

故郷の人々がご自分を信頼していないのを見て、イエス様はまわりの村々を巡り歩きます。そして村々の人々に教えていきます。さらに12人の弟子たちを二人ずつ派遣することにされます。二人一組の宣教活動は、初期キリスト教の中でもおこなわれていたようです。ではなぜ二人必要なのでしょう。

一つには、当時の旅は大きな危険を伴っていたので、二人一緒に行動していたのではないかと考えられています。またユダヤ社会では裁判などをする場合、証言には二人または三人が必要でした。だから福音を宣べ伝えるときも、最低二人は必要だったからではないかと考える人もいます。

しかしここで重要なことは、12人はイエス様から権威を与えられているということです。弟子たちのすべての行動は、イエス様から出て来ているのです。

6:8-9 （そして）旅（道の途中）には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金（銅貨）も持たず、ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた。

この持ち物の規定は、福音書によって少しずつ違います。

	杖	パン	袋	お金	履物	下着
マタイ	×		×	金貨・銀貨・銅貨×	×	2枚×
マルコ	1本○	×	×	銅貨×	○	2枚着る×
ルカ	×	×	×	×	×	2枚×

このように、マルコ福音書では杖と履物は持って行ってもよいとされています。杖は野獣を退治するのに、また履物は蛇や砂の暑さから足を守るのに必要でした。マタイとルカは、それすら持って行ってはならないと言われます。

そこに書かれているのは、神さま以外に頼る必要はないとのメッセージです。イエス様はそれぞれの物を持って行くことを禁じられています。しかしそれは、イエス様がそれらの物は必要ない、持って行かなくてもよいと言われているということです。なぜなら神さまが守ってくださるからです。

ちなみに下着を二枚重ね着するのは、野宿などをする際に夜の冷気から身を守るためでした。つまり下着を二枚着なくてもよいということは、神さまが泊まる所を必ず用意して下さるという約束でもあるのです。

6:10 また（そして彼らに）、こゝも言われた。「どこでも、ある家に入ったら、その土地（そこ）から旅立つ（出る）ときまで、その家にとどまりなさい。

宿泊のためにどこか家に入れてもらったから、その土地を離れるまでそこを離れるなどイエス様は言われます。初期の伝道者は、土地のことを知るうちに、もっとよい家を見つけることもあったでしょう。しかしイエス様は、家から家へと渡り歩くなと言われます。

ユダヤには、伝道者は主人から打たれるか、持ち物を後ろから投げつけられると、その家を出て行かなければならないという教えがあったそうです。また三日以上家に居座る伝道者は、「偽預言者」だと言われていました。



しかし、最初の家を与えてくださったのは神さまなのです。弟子たちは神さまを信頼し、その場所に留まり続けることが大切なのです。

6:11 しかし、あなたがたを迎え（受け）入れず、あなたがたに耳を傾けようとし（聞かない（場）所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの（に対する）証しとして足の裏の埃を払い落とささい。」

足の裏の埃を払い落とすことは、元来その場所に対する呪いを意味しました。着衣の塵を払うことや、手を洗う（イエス様の裁判の時に、ポンティオ・ピラトがおこなった）ということよりも、この行為は相手に対する強い拒絶をあらわします。

しかしここには、「彼らに対する証しとして」という言葉が入っています。この象徴的な行為は呪いではなく、神さまに対する証言なのです。

誰一人としてあなたたちを受け入れず、聞かない土地があれば、あなたは足の裏の埃を払いなさいと命じられています。旧約聖書の中でソドムの町が滅ぼされたとき、アブラハムは町に 10 人の正しい人がいれば滅ぼさないで欲しいと頼みました。しかしここでイエス様は、たとえ 1 人でも受け入れてくれたら、そこに留まりなさいと言われていました。つまり 一人でも受け入れる人がいる場所では、そこから福音は広がっていくのです。

もし誰も受け入れなかったとしても、呪ったり裁いたりするのは弟子たちではありません。あとは神さまにお任せするのです。

6:12-13 (そして) 十二人(彼ら)は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。
そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。

弟子たちは、人々が悔い改めるために宣教しました。悔い改めるとは、今までの神さまに背いた生き方から向きを180度変えて、神さまの方に向きなおすことです。

「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」。イエス様はガリラヤで伝道を始めたとき、このような言葉を告げられました。そして今、この言葉は弟子たちの口から発せられ、悪霊を追い出し病人をいやす権威は、弟子たちの手に与えられました。

<後半の箇所から>

イエス様が弟子たちに命じられたことは、マルコ福音書が書かれた時代の伝道者にも引き継がれていったのではないかと思います。何よりもまず、神さまに寄り頼みなさいということが、一番のポイントだったのでしょう。

杖や履物を持って行くか否かは重要なことではないのです。だから福音書によって書き方がまちまちであっても、大きな問題ではなかったのでしょうか。イエス様はこの言葉を通して、あなたたちは何に信頼をおくのかを第一に考えなさいと言っておられるのではないのでしょうか。

神さまのみ心に従って生きていくときに、必要な物はすべて与えられる、それが信仰なのではないでしょうか。神さまにすべてを委ね、歩んで行けたらと思います。

すべてを放棄すること、そしてすべての持ち物を捨てること。それは神さまにすべてを委ね、すべてを任せることなのです。福音書を通してイエス様は、「自分を捨て」と言われていきます。捨てるとは自分のこれまでの生き方を、そして自分自身を否定し、神さまにのみ頼ることなのです。

今回の学びはこれで終わります。次回は12月17日(木)10時30分に変更します。「洗礼者ヨハネ、殺される」(マルコ6:14~29)について学んでいきます。